

NEWS

JAAF
HIROSHIMA

陸協ひろしまニュース
一般財団法人 広島陸上競技協会

第93号

R1.12.22発行

成年女子100mで
湯浅佳那子初優勝!!
いきいき茨城ゆめ国体で躍進



広島大好き 6度目の正直 鮮やかに

湯浅 佳那子

女子100m

日本体育大学

Yuasa Kanako

プロフィール | 湯浅佳那子(ゆあさ・かなこ)／身長:161cm／体重54g／1997年(平成9年)5月23日生まれ
1997年(平成9年)広島県安芸郡熊野町生まれ→2004年(平成16年)熊野第二小学校・入学→2010年(平成22年)熊野町立熊野中学校・入学→2013年(平成25年)広島皆実高等学校・入学→2016年(平成28年)日本体育大学・入学

主な成績 | 2018年 全日本インカレ4×100mR 日本学生新記録 44秒59
2018年 日本学生陸上競技個人選手権200m 優勝 24秒02(+1.8)(県新)
2019年 日本学生対校選手権100m 優勝 11秒64(+0.7)
2019年 国民体育大会成年女子100m 優勝 11秒62(+1.1)



ゴールから約40秒の静寂の後、歓喜の瞬間は訪れた。10月5日に茨城県ひたちなか市の笠松運動公園陸上競技場で開催された茨城国体成年女子100m決勝。電光掲示板の一番上に表示されたのは広島の湯浅佳那子(日体大、広島・皆実高出身)だった。万感の思いがこみ上げたのだろう。両手を掲げて笑顔を見せたのは一瞬だけ。その後は何度も顔を手で覆い、こみ上げる涙を拭った。

「うれしいです。こういう舞台で勝てて良かった。陸上をしてきて良かったって、心から思います。家族にいいプレゼントを贈れるので、それがうれしいです」。涙で途切れがちな優勝インタビューに、会場から温かい拍手が送られた。

熊野中、皆実高時代を含めた過去5度の国体はいずれも準決勝までに敗退。だが、「6度目の正直」は鮮やかだった。日本記録保持者の福島千里(北海道・セイコー)や今季復活を果たした土井杏南(埼玉・JAL)らトップ選手が名を連ねる中、予選は追い風参考ながら全体1位の11秒52をマーク。準決勝は隣県岡山のライバル齋藤愛美(大阪成蹊大)、土井に次ぐ11秒81で通過した。「準決勝でスタートがう

まくいなくて、気にしていた部分はあったけど、決勝は思い切りこうと集中した」

注目の決勝は、号砲と同時に勢いよく飛び出した。「スタートを意識していたわりには、あまりでられない感じだった」という。それでも中盤以降も滑らかに加速した。齋藤の追い上げを0秒02差でかわし、追い風1,1mで自己ベストの11秒62を出してフィニッシュ。「勝てたかどうか分からなかった」という不安が、40秒後の歓喜を一層引き立てた。

熊野第二小6年時に織田幹雄記念国際大会の小学女子100mで優勝するなど、小学生時代から県内トップを走ってきた。熊野中では100m障害で全国中学校大会やジュニアオリンピックに出場したものの、全国上位には届かずじまい。皆実高時代もインターハイや国体の準決勝で惜敗し、全国舞台の決勝進出を逃し続けた。

「あと一步」は日体大進学後も続く。3年時の関東学生対校選手権や日本学生個人選手権は2位。今年に入っても、1月の女子リレー日本代表候補選考会で落選した。女子主将を任せられ、「自覚が増した」という最終学年は6月の関東学生対校選手権で100m、200m、400mリレーの3冠を達成。ただ、上り調子で迎えた日本選手権100m準決勝では、決勝進出ラインまで0秒01の僅差で涙をのんだ。

大舞台で何度も流した悔し涙。これが糧になった。「大事な部分で勝てない自分が本当に嫌だった。大きな大会で結果を残せるよう、ちゃんと頑張ろうと意識した」と一念発起した。ユニバーシアード(ナポリ)出場や夏場の鍛錬を通じて心身ともにレベルアップ。9月の日本学生対校選手権では100mで悲願の全国大会初優勝を飾った。茨城国体での走りと併せ、秋の女子スプリント界で一気に「主役」に躍り出た。

故郷への思いも人一倍だ。「広島が大

好き」と言い切り、憧れの木村文子(エディオン)や山縣亮太(セイコー、広島・修道高出)、高山峻野(ゼンリン、広島工大高



出)ら郷土の先輩の活躍に「刺激をもらっている。私も置いていかれないようにしたい」と力を込める。国体優勝の喜びも「広島に届けたい」とさわやかに笑った。

もちろん、ここで歩みを止めるつもりはない。来春の卒業後も競技を続け、「東京五輪出場」という大きな夢を抱いているからだ。参加標準記録は日本記録の11秒21を上回る11秒15。出場には何重もの壁が立ちはだかるが、「冬季練習を頑張って、東京五輪に食らいつけるぐらいの選手になりたい。もう何段階もレベルアップしたい」と意欲に満ちている。



鍵は得意のスタートだ。世界陸上での外国人選手の動きを研究し、「前半の体が起き上がるまでの加速を伸ばしたい。そうすれば後半をもっと楽に行けるはず」。遅咲きの22歳。急カーブを描く成長曲線の先に、日本中を驚かせる瞬間が待っているかもしれない。

text by K